

始覺全身在帝郷

はじ おぼ ぜんしんていきょう あ
始めて覚ゆ全身帝郷に在ることを
ごう こ ふうげつしゅう
(『江湖風月集』)



7月に入りましたが、相変わらずの梅雨空、不安定な気候が続きます。さて、今回の禅語です。

はじ おぼ ぜんしんていきょう あ
始めて覚ゆ、全身帝郷に在ることを

誰もが、毎日毎日仕事に忙殺され、日常に振り回され、いつしか心のゆとりをなくしてしまいがちです... あれをしなくちゃ、これをかたづけなければ... 頭も心も、いっぱいいっぱい...

そんな時、ハッと気づく...

みちばた くさばな せい そ か れん
道端の名も無き草花が、清楚で可憐な白い花を咲かせ、雨上がりの露の雫がキラキラと輝きながら緑の草葉の上に零れ散る...

どこまでも深い青空に、白銀色の夏雲が力強く盛り上がり、山々は、緑、黄緑、青緑、紺... 色とりどりの衣装を身に纏っています...

ああ、こんな素晴らしいものに囲まれていながら、自分はいったい、いまままで何を見ていたのだろうか！

気が付けば、自分はこんな素晴らしい世界にいるではないか...

はじ おぼ ぜんしんていきょう あ
始めて覚ゆ、全身帝郷に在ることを...

ていきょう てんてい
「帝郷」というのは、もともと古代中国の神話的な最高神「天帝」の住まうところ、「道教」にとっての「理想郷」です。

『莊子』には、このようなくだりがあります(『天地篇』一二)。

せんさい よ いと さ じょうせん か はくうん じょう ていきょう
... 千歳世を厭えば去りて上僊し、彼の白雲に乗じて帝郷に至るべし(そんなにこの世を嫌だと思いでしたら、この世を去って仙人となり、大空のあの白雲に乗って天帝の地、帝郷に行ってしまうばいいではないですか)...

要するに、この世を厭うならば、仙術を身につけ、その神通力によっ

て雲に乗り、理想の地「帝郷」に行く...というのです。

「帝郷」とは、厳しい修行を重ね、雲ですら自由に操ることのできるような仙術を身につけて、初めて至りつくことのできる世界、この世ならぬ「神仙」の世界です。

その理想の「帝郷」に、この自分が「全身」でいる...

この禅語には、自分が、いま現にその理想郷にいるのだ、という驚きと、心からの喜びが溢れています。

誰もが憧れる、あの「帝郷」を、ただ夢物語として漠然と思い描くのではなく、あるいは願ったとしても、とてもかなうことのない「見果てぬ夢」として、はるか遠方に、微かに仰ぎ見るのでもなく、いま、ここにおいて、このわたしが、自分自身が、全身でそこにいる...

もちろん、わたしたちは、自分たちの生きているこの世界が理想的なものとはほど遠いものであることを、嫌という程思い知らされています。だからこそ、あるべき姿を体現した、理想の世界を思い浮かべる。

しかし、心の奥底で、どこかに理想の場所はないか... 誰かが、どこかに理想郷を作ってくれないだろうか... そんな風に思っているのであれば、そんなものはどこにも存在するはずがありませんし、自分の生きる現実も、何も変わりはない。

「帝郷」に至るためには、何よりもまず、自分自身が一步を踏み出すこと...

どれほど遠い道程であろうとも、一步一步着実に、力強く足を踏みしめて歩いていけば、必ず気が付くときが来ます。

わたしたちがそこに生きている世界... それは、さまざまな恵みに満ちあふれています。わたしたちが「生きている」世界というのは、実はわたしたちがそこで「生かされている」世界なのです。



わたしたちの「あるべき姿」に向って、黙々と歩みを進めていく、その途上において、世界の尊さ、素晴らしさに気づく... そして感謝の心をもって、足下を、頭上を、回りを見返す...

「帝郷」への入り口は、そこにしかないのです。